

記入日（西暦）2024年9月5日

一般社団法人日本医療薬学会 学術委員会委員長 殿

## 医療薬学学術小委員会 研究活動報告書（最終報告）

### 1. 小委員会名、研究テーマ

小委員会名	2023年度医療薬学学術第2小委員会
研究テーマ	薬局におけるDXに対する薬局薬剤師の意識に関する調査研究

### 2. 小委員会の委員長、構成委員

委員長	フリガナ	サトウ ヒロキ
	氏名	佐藤 宏樹
	所属施設の名称 (正式名称)	東京大学 大学院情報学環／大学院薬学系研究科

構成委員	氏名	所属
	澤田 康文	東京大学大学院薬学系研究科
	古賀 友一郎	一般社団法人福岡市薬剤師会
	長谷川 佳孝	株式会社アインホールディングス
	森 和明	株式会社ユヤマ

### 3. 研究の目的

医療・介護現場にもDX(デジタルトランスフォーメーション)の波が押し寄せている。政府・与党の医療DX令和ビジョン2030や、経済財政運営と改革の基本方針2022(骨太の方針)では、持続可能な社会保障制度の構築のために「医療・介護分野でのDXを含む技術革新を通じたサービスの効率化・質の向上を図る」とされている。具体的な医療DXの基盤としては、厚生労働省のデータヘルス改革推進本部のもと、オンライン資格確認等システムの運用が開始され、電子処方箋の仕組み、医療情報を患者や全国の医療機関等で確認できる仕組み「全国医療情報プラットフォーム」の構築が急速に行われている。

このように、DXの基盤自体は整いつつあるものの、それを医療・介護現場の現場で実際に運用する職種の一つは薬剤師であり、薬剤師がこれらの基盤を活用できなければ、DXの恩恵を受けることはできない。特に、規模の小さい医療機関・薬局等では、DXへの設備投資が十分に行えなかったり、デジタルに不慣れた薬剤師はDXのシステム自体を活用できなかったりするなど、様々な不安や課題を抱えていることが推察

される。すなわち、医療DXの基盤が整ったとしても、それらを活用できなければ真のDXには繋がらない。

そこで本研究では、医療DXを円滑に進めるために、薬剤師を対象とした調査を行い、DXに対して抱える不安や課題、望まれる支援などを明らかにする。それにより、薬局におけるDXを推進するための対策の立案に繋がり、より良い医療提供環境が構築されることが期待される。

注) 枠の大きさは必要に応じて修正し、詳細に記載すること。

#### 4-1. 研究活動の総括

全国の薬局薬剤師を対象とし、2023年9月13日～2023年12月1日にGoogle Formsを用いたウェブアンケートを実施した。1,813件の回答が得られ、基礎情報に不備がある回答を除外した有効回答数は1,755件(96.8%)であった。主な結果を以下に示す。

##### a. 回答者の基礎情報

- ✓ 男性 55%、女性 45%
- ✓ 20代 11%、30代 25%、40代 28%、50代 25%、60代 9%、70代以上 2%
- ✓ 業務経験 10年以上のベテラン層が 7割を占めた
- ✓ 5店舗以下の個人経営の薬局(43%)と101店舗以上展開する大規模な薬局グループ(31%)

##### b. 回答者のDX全般に対する一般的認識

- ✓ スマートフォンやオンライン学習、仕事でのWeb会議の利用率は80%以上と高い
- ✓ スマート家電やスマートウォッチなど、利用できなくても困らないものの利用率は30%未満と低い
- ✓ 一般層(野村総合研究所、2021年2月の調査、10～60代の男女)よりも利用率は高い傾向
- ✓ DX全般、医療・介護分野のDXに「賛同する」「どちらか」と回答した人は9割以上
- ✓ DX推進、医療・介護分野のDX推進に対し、肯定的な回答(快適になる、どちらかという快適になる、良質になる、どちらかという良質になる)をした人は7割以上
- ✓ 一般層(文部科学省、2021年12月の調査、10～60代の男女)よりも肯定的にとらえている

##### c. 医療DXへの対応状況

- ✓ オンライン資格確認システムや電子薬歴(クラウド以外)、電子会計システムなどの利用率は70%以上
- ✓ 医療用アプリ(禁煙、血圧)やITC基盤の地域医療連携、患者フォローアップシステムなどの利用率は25%未満
- ✓ 音声入力システムやIoTお薬カレンダー、在宅業務支援システムなどの利用率も20%未満
- ✓ 薬局外との連携(患者や別の企業・団体など)が必要なシステムや、従来人がアナログで行ってきた業務に関わるシステムの利用率はまだ低い
- ✓ どのシステムも「不自由なく使用できる」と回答した人は4割以下で、「基本的な機能は使用できる」と回答した人まで含めると7割程度
- ✓ ・薬局で使用しているが使いこなせていない人が多いのは、マイナ保険証、電子お薬手帳、オンライン服薬指導システム、電子処方箋など
- ✓ これらシステムの役立ち度に関して、肯定的な回答(役立っている・役立つと思う、どちらかといえば役立っている・どちらかといえば役立つと思う)が7割以上

#### d. 医療DXへの期待や不安など

- ✓ 薬局DXに対して、9割以上が業務の効率化を図ることと、8割以上が調剤ミスなどの防止を期待
- ✓ 時間外業務の縮小、服薬指導の充実を期待している人は5割前後
- ✓ 薬局DXに対しての不安として、使い方を習得するのに時間・手間がかかる、導入や維持に費用がかかるなどが多かった
- ✓ 薬剤師の仕事がなくなるとの不安は少なかった
- ✓ 薬局DXに対して求める支援として、仕様や機能の統一、研修、財政的支援、調剤報酬制度上の支援、患者や社会への広報・周知を求める人はいずれも5割り程度であった

薬局におけるDXに関して、ほとんどの薬剤師が肯定的に捉えている一方で、現時点では機器やシステムが十分に広がっていない、また、十分に使いこなせていないなどの状況にあり、これらを活用することによる薬剤師業務の変化までに考えや思いが至っていない現状にあることが示唆される。

機器・システムの使用に際しては、研修や機器の仕様統一等が求められており、特に高齢の薬剤師に対する重点的な支援が必要であると推測される。また、DX導入時には特に個人経営の薬局に対する財政面での援助などが求められることが示唆された。

本研究の結果が薬剤師による薬局DX活用の一助となり、より良い医療提供環境の構築に寄与できることを期待する。

注) 枠の大きさは必要に応じて修正し、各項目について詳細に記載すること。

#### 4-2. 研究業績 (学会発表、論文等)

薬局DX推進時に求められる支援に関する意識調査. 佐藤七香, 佐藤宏樹, 柳奈津代, 古賀友一郎, 長谷川佳孝, 森和明, 澤田康文. 第34回日本医療薬学会年会(千葉) <発表予定>

注) 本研究活動の成果に関する学会発表や論文情報を記載すること。本報告書の提出後、本研究の成果を以て得られた新たな研究業績(学会発表や論文等)が生じた際には、本項目を更新した報告書を提出すること。枠の大きさは必要に応じて修正し、各項目について詳細に記載すること。

#### 5. 共同研究、他学会・団体からの支援 (COI申告を含む)

変更なし

注) 提出済みの研究計画書又は研究活動報告書の記載事項から変更がある場合にのみ記載すること。

## 6. 倫理指針、科学者の行動規範、個人情報保護法等への適合状況（倫理審査等の受審及び承認取得状況を含む）

本調査は、東京大学大学院薬学系研究科・薬学部 人を対象とする研究倫理審査委員会の承認（受付番号：5-5、令和5年8月23日）を受け、東京大学大学院薬学系研究科長・薬学部長の実施許可（令和5年8月28日）を受けて実施した。

注） 前回提出済みの研究計画書又は研究活動報告書の記載事項から変更がある場合にのみ記載すること。